

# 第1回 教育体制検討会議議事録

招集日時 平成25年6月19日(水曜日) 午後1時30分開会/午後3時2分閉会

招集場所 加賀市役所別館3階 301会議室

出席者 清水潔顧問、寺西盛雄顧問、松田章一顧問、笹原忠義顧問、寺前市長、  
上田教育委員長、石橋委員、酒谷委員、畑中委員、旭教育長、  
掛山事務局長、網谷次長、中矢次長、梶谷教育庶務課長、田嶋文化課長、  
谷口スポーツ課長、西出生涯学習課長、矢嶋図書館長、柏田市政図書室長、  
米屋教育庶務課長補佐、宮永学校指導課長補佐、岡田学校指導課係長

旭教育長 皆さんこんにちは。定刻となりましたので、第1回教育体制検討会議を始めさせていただきます。私は進行役を務めさせていただきます加賀市教育長の旭と申します。どうぞよろしくお願いたします。不慣れではありますが、誠心誠意、一生懸命やりたいと思いますので、どうぞ協力のほどお願いたします。それではまず最初に、主催者を代表いたしまして上田政憲加賀市教育委員会教育委員長がご挨拶を申し上げます。お願いたします。

上田委員長 皆さんこんにちは。本日は前文部科学省事務次官の清水潔さんをはじめ、4名の顧問の先生方に、公私共に大変お忙しい中、貴重な時間をお取りくださいましてご出席いただきましたこと誠にありがとうございます。心から感謝を申し上げたいと思います。私は今ほどご紹介にありましたように、今年の11月に加賀市教育委員会の委員長に選任されました上田と申します。加賀市教育委員会を代表しまして一言ご挨拶を申し上げたいと思います。さて、今年の2月に大津いじめ事件の第三者委員会による、いじめの実態の解明がなされたことは記憶に新しいと思いますけども、その後も全国でいじめによると思われる痛ましい事件がいくつも発生しております。なかなかいじめの撲滅という点では、非常にその難しさを感じるところでございます。ここ加賀市におきましても不断の努力によりまして、いじめについては改善しつつあるわけではございますけども、全く皆無であるというわけではありません。いじめの他にもですね、児童生徒の学習環境の改善、あるいは学力の向上、不登校の解消、あるいは暴力行為等の防止といったような緊急に解決しなければならない問題がたくさんございます。私たち教育委員会は、子どもの将来を見据えた加賀市の教育体制について何度も議論を交わしてまいりました。加賀市の教育体制整備計画と申しますのは、私たち5名の教育委員が作り上げていかなければならないわけですが、何分未熟な者の集まりでございまして、その点、国や県などで長年教育に携わってこられた皆様方に大所高所からの貴重なご意見やご提言をいただき、それをこの整備計画に反映させていただくことでより完璧なものに仕上げたいというふうに思っております。今申し上げた整備計画の策定目的と申し上げますと、

加賀市の教育力のレベルを向上させること。それから加賀市の子ども達に自信と誇りと意欲を持たせること。そして加賀市の人材育成。これを目的にしております。具体的にはいじめ・体罰・暴力行為の防止、子どもの貧困対策、学校・家庭・地域の連携強化、地産地学の視点からの小学校・中学校・高等学校の連携、少子化による学校の適正規模と適正配置、加賀温泉駅周辺における文教ゾーンの整備、これらにつきまして検討をしまいたいと考えております。加賀市と加賀市の子ども達のため、お力をお貸しくudasaimasuyoudouzyoroshikunogoinishimasu.

旭教育長 ありがとうございます。ご多用の中、本日ご出席いただきました寺前秀一  
加賀市長様からご挨拶をお願いいたします。

寺前市長 加賀市長の寺前でございます。今ほど上田教育委員長さんをご挨拶なされましたので、重複するといけませんけれども、加賀市の市長としまして本教育体制検討会議を設けていただいた趣旨を申し上げたいと思います。あらかじめスピーチ原稿をお配りしておりますので、私としては即興で挨拶することが多いんですけど、大変重要な問題がありまして読み上げさせていただきます。

私は市政の実施に当たって、最重要課題は「医療」と「教育」であると常々訴えてきました。「医療」は統合新病院の建設で一定の目途が立ったと判断しています。次の重要課題は「教育」であります。加賀市のみならず日本全体が人口減少社会は長期間継続するとの厳しい認識をしています。従いまして、加賀市の児童・生徒の数も当然減少し続けると認識しています。その厳しい認識を前提にして、加賀市における教育サービスの提供体制を考えることが重要であると思っています。特に高校教育については、市内中学生の半数が市外の高校に進学するという状況が長年にわたり継続し、しかも市民の大半がそのことに問題意識を抱かなかったことにあると思っています。その一方で小学校については、1899年明治の大合併時の骨格のまま21の小学区が維持されてきていますが、学校教育に必要な集団教育サービスを提供するには支障をきたす恐れが増大することが予想されます。

これらの問題を考えるにあたっての基本スタンスは、当然のことですが、合議制による加賀市教育委員会を重視することだと思っています。いじめや体罰防止、教科書選定といった重要問題は人生観、価値観に関わる場所があり、必ずしも一つの正解が用意されているわけではないと思っています。外部専門家の意見も充分にお聞きし、オープンな場で充分に議論を尽くしてもらいたいと願っております。そのために必要なことは市としても最大限実施する覚悟であります。今日の会議もその一環であります。そして提案された方向性については、最大の努力を払って実現に向けてまい進するつもりであります。加賀市議会も、加賀市民も、これから出されることが期待さ

れる加賀市教育委員会の結論を最大限尊重することが重要であると思っております。皆様のご理解とご協力をお願いしまして、開会にあたりましてのご挨拶とさせていただきます。

旭教育長

ありがとうございました。それでは、本日第1回目ということですので、顧問の先生方におかれましては自己紹介を兼ねてご自身の教育に対する思いや本会への提言等をいただければと思います。誠に申し訳ございませんが、時間の関係もございましてお一人10分程度でお願いできないでしょうか。それでは清水顧問からお願いいたします。

清水顧問

ご紹介いただきました清水でございます。私は先般こちらで講演会といひますか、呼ばれてその縁でこちらへお寄せいただくことになったんだろうと思っています。そのときも申し上げましたが、寺前市長と私は大学時代同級生でございまして、ごく最近になりまして寺前さんが市長をされているということで、またその市政として全体の面的な中でいろんなものの様々なネットワークで考えるという基本的な方向性に大いに賛意を表するというか共感を覚える、こういうことで今日も参らせていただきました。私は2つ申し上げたいと思います。私は昭和50年に文部省に入省し、昨年1月で辞めさせていただきました。そういうことでどちらかといえば高等教育研究方が長かったのですが、先週IPS研究所に行きまいりました。そのきっかけというのは、あそこの山中先生のパートナーだった高橋君という若い33歳ですけども、これから日本を背負う若い象徴としてその分野で推薦したことがございまして、その後どうしているかなということで見に行ったんです。一つ申し上げたいというのは、山中先生と高橋君というのは実に似ている。要するに何もなかったというところが共通点だと私は思っています。山中先生は結局、伝統というよりも研究の生活、アメリカから帰ってきてもうこれでは到底やっていけない、もう後がないというところで先端大学に異動された。そしてそこには偉い山田先生という植物に強い先生がおられたけども、動物に強い人ではなかった。ということ、思い切って後がないから大風呂敷を広げた。そこに、高橋君の分野は化学ですからライフサイエンスとは全く関係ないですけども、初めて会って大風呂敷のような夢のようなことを語る人と一緒にやりたいと思って、彼もまた後がない口ですから一緒にやり出したというのが業績を上げるきっかけになったということですね。何もないというところで夢と志と一緒にやって、お互い何もできなかつたら山中先生は「僕は出来の悪い整形外科医だから、手術をしないで済むクリニックをやるから受付は高橋君がやればいい。そして一緒に暮らそうよ。」と、そういう面倒を見るからということをやったということで、要は言いたかったのは教育というか人というか、そういう人の質というのは、その社会とかコミュニティを規定するということでもあります。東日本大震災の後、様々な形でいる

んな夢とかそういうものの形を与えてくれたということは、ないところから始まるということと言いたかったということが一つ。それからもう一つは、私は早稲田大学の客員教授ということで週1回教えているんですけど、そこで教員あるいは現職あるいは教員足らんとする学生たちを教えて、そこで教えようとしているのは要するに学校のシステム、学校制度というのは実は法律や政令や省令や予算や通知のいろんな組み合わせの非常に組み合わせた形で、大体の重要なことは省令で決まっている。だけれども実際に東大の9月入学もそうであるように省令レベルの話なんで、歴史的にも9月入学というのは大正まであったにも関わらず、その他のいろんなものと結びついて非常に難しそうにも見えるし、やろうとしている場合にはある部分で難しくなくもある。つまりお互いに相互に補完し合いながらガチガチになっているものをお互いに一つ一つ解きほぐしていくと意外と見えるものがあるかもしれないよと、こんなことを大学で教えています。また各自のことについてはいろいろ勉強させていただきながら、またこういう協議を言わせていただく場面もあろうかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

旭教育長

どうもありがとうございます。続きまして、石川県公立大学法人理事長で、元石川県教育長でもありました寺西盛雄様、自己紹介を兼ねて一言お願いいたします。

寺西顧問

ただ今ご紹介を頂戴いたしました寺西でございます。勉強をあまりしてきませんでしたので、これまでの教育に携わった経験で語らせていただきたいと思っております。皆さんご存知のとおり、県立大学として野々市市に1校、それからかほく市に看護大学がございまして、この二つをまとめて公立大学法人といたしましたわけでありまして。この法人化というのは、国が選考しておられまして国立大学が確か81校ですか。これは法律上、全部法人化することが決まっております。大学の学長さんは金沢大学法人の学長であり、大学の学長と兼務している。ところが県立大学が自修されておりました、法人化する・しないというのはそれぞれの県あるいは市の判断でいいと、こういうふうになっております。石川県の場合は少々遅れ気味でございましたけれども23年度に法人化し、現在申し上げましたように2つの大学の経営管理等を所管いたしている次第であります。全国から言うと公立大学が82校、時々変わりますけれども、その内約7割5分の61校が公立法人に衣替えをしていると相まっている次第であります。せつかくここへ来たわけですから、我が大学への入学をしてほしいと思って来るときにちょっと今年度の状況を調べてまいりましたら、時間がなくて看護大学を見る暇がなかったんですけども県立大学へは本年度一人だけでした。大変寂しゅう思いまして、せつかく顧問に就任させていただいた以上は5~6名ぜひ来てほしいと、このように思っておるわけでございます。推薦入学もございまして、一般の試験もある

わけでありますので、ぜひ皆さんのお力で良き学生を送っていただけたらありがたい、このように思っているわけであります。先ほど滋賀県におけるいろんな事件もありましたけども、私が教育長になったのはもう 17～18 年前で、平成の 7 年でしたか。3 年 3 ヶ月教育長をしております、当時一番びっくりしたのはやっぱり神戸の酒鬼薔薇聖斗事件というのが教育に携わっている皆さんほとんどの方が記憶にあると思いますけども、大混乱をいたしたわけであります。この学校で起きたことは、神戸であろうと横浜であろうと、問題は必ず全国共通の課題として命題を与えられたようなものでございまして、石川県ではないということも言えませんが、その問題がお互いに学ばなければならない、対応しなければならない事件になるのでございまして、新米の教育長は大変苦勞をさせられました。私も初めて平成 7 年にこの教育長を拝命して、それまではずっと県庁部長、課長をやっておりましたので教育というものの難しさは実感いたしましたわけでございます。今日は清水先生もおいでですが、文科省から緊急教育長会議とか何回か招集されましたし、県連会議たるものを設置いたしまして地場産の会議室で素人が知った顔でお願いをいたしたようなことが、昨日のように思っております。いつでもどこでもこの教育問題というのは、子どもが新しくどんどん出てくるわけですから、すしエンドレスでございまして、皆さんのご苦勞をかけておいでではないかとこのように察しているわけです。それからもう一つ記憶にあるのは少子化問題で、加賀方面はいいんですけども、能登の方が大変子どもの数が減りまして統廃合のスタートを切らせていただきました。どこへいってもお叱りばかりいただきましたけども、今日、能登の方は半分学校が減少したと思います。加賀方面は全く手が付いていないだろうと思います。小学校・中学校でも、さっき市長さんから大変厳しい状況にあるとお話をいただきましたが、学校の統廃合問題というのは非常に厳しいものがありまして、よく考えれば長い間そこで育ったお父さん、お母さん、お爺ちゃん、お婆ちゃんが、自分の母校がなくなるわけですから絶対反対ということをおっしゃるわけでありまして当然だと思います。そういう意味では色々な議論の中でお互いに求めるもの、一致点を見出さなければならない苦勞がございまして、これは仕事に与えられた者にとっては宿命ですから、いろんなご苦勞もこれから加賀市でも執行しなければならないものがあるのではないかなと思っております。今ほど申し上げましたように、この教育界というのは大変人間を指導する、人間を愛ある方向へ持っていく、大変難しい問題を常に抱えております。そういう意味では、この会議の場でお互いの疎通が必要なかなと思っております。教育に特効薬がございませぬので、家庭と学校とそれから地域社会がいかに協力し合って、三位一体で努力を重ねていくということに尽きるのではないかと、このように思っております。私がここへ来て今思っているのは、前の前の教育長さん、藪谷さんでしたね。私が教育長をしておりますときに教育長をされていたのではないかと。大変記憶がちょっと曖昧ですけ

ども、お亡くなりになられるまでずっと年に 2~3 回お酒を飲んで、大変好きな方でした。加賀に出ておいでという機会がずっとあります。去年でしたか、お亡くなりになられてお参りさせていただきましたけども、非常に立派な人だなあと、このように思ってお付き合いをいたしたわけでございます。これからいろんなご意見の中で自分の考えを述べることができればいいなど、このように思っております。簡単でございますが自己紹介とさせていただきます。

旭教育長

どうもありがとうございました。前々の教育長さんは藪谷教育長さんです。昨年お亡くなりになりました。それでは続きまして、前鈴木大拙記念館の館長であられまして、元金沢大学附属高等学校副校長であられました松田章一先生、自己紹介を兼ねて一言ご挨拶をお願いいたします。

松田顧問

松田でございます。私は昭和 39 年から平成 7 年かな、ずっと金沢大学の教育学部附属高校、今はもうその学校の名前はもうどう言ってもいいかわからないほど長い長い名前になっていますけども、そこで 32 年ほど教師を務めておりました。ですからその体験からお話、あるいは今後の審議にも参加させていただくことになるんだろうと思います。ただ、非常に附属高校というのはユニークな学校でございます、実験校であると同時に国立の学校でありましたから、なんといっても当時文部省、文科省のいろんな指導下に直接影響を受ける学校でございました。私どもとしてはそういう学校でいかに指導要領を上手くやるかというのは当然ですけども、そこに欠けているのは何かという立場で様々なことを考えてきました。ですから次の指導要領が出る時にはこういう問題を提示しなければいけないということが学校の立場でございました。そういうことばかりやっていると生徒には迷惑だと思うんですけども、そういう研究校であると同時にもう一つは教育実習校でございます。教育実習というのは、当時は高校で 3 週間、小中学校で 2 週間、体育で 3 週間一切教師は授業をしないという格好でございます。その間全て生徒は自分でやらなければいけない。それを後ろでバックアップするのか怒るのか、いろんなことをやっていたけどもそういう学校ですから、普通の授業は約 2 ヶ月分ないと考えて授業しているわけですね。ですからいわゆる指導要領をきちんとやっていると、とても間に合わないということがありまして、そういう意味の中で生活していましたので、あるいはこの加賀市がこれから考えられている学校・生徒に対してはあまり役に立たないのではないかというふうな気もしないでもなかったわけですけども、ただ、市長が、彼を教えたのは私でございますので責任上やってまいりましたわけです。私は教育という言葉は 2 つに分けたほうがいいと、「教」と「育」だと思っているんですね。「教」というのは基礎的な学習でありますからどうしてもないといけませんけども、今学校で忘れられているのは「育」の部分なんです

ね。育てるということは非常に難しいことをごさいますて、その部分がある意味で全国的に放棄されているのではないか。いじめなんて正にその部分の問題ですね。「教」の部分は大学受験がありますから一部は非常に頑張っています、が、「育」の部分が非常に欠けていて、あるときには例えば先生とクラブに通うとか、ゆとりの教育とかいろいろな面で補完されていきましたけれども、しかし教師そのものが「育」を忘れてしまっているんですから、これはものにならないというふうに私は考えておりました。なぜそうかというところ「教」というのはですね、要するに知的なものを教えていくわけでありますから、理性を育てることは確かであります。しかしながら「育」の方は感性の問題ですね。私は勤めていまして、やっぱり感性の豊かなお子さんの方が伸びるといふふうに思いました。教えるということは教師を出ないわけですから、これから出るな、前へ進むなとこういふことを言うわけですから、本来は人材というのは教師なんかを超えていかないといけない。超えていく部分をどのように指導するかというのが、本当に大変なことだと思うんですね。教育実習生などにこの問題を提示するんですけども、できないのは無理ないので、長年の学校体系の中からその部分を考えないといけないのではないかと思います。もう一つは、なんといいいますか生徒の個性を育てるといふ言葉をよく使いますが、多くは教師が枠を持って個性をそこへ押し込めていくという例が多いような気がしますね。ああしてはいけない、こうしてはいけないといふような形で枠の中で育てようとする。そうすれば教師の資質が駄目な場合は、子どもだって駄目になるわけですね。いつも考え方は教師が一番偉いんで、子どもは先生の言うことを聞くんだ、良い子になるんだと、良い子というのは教師の枠の中に育つということしか考えないとすれば、これは非常に不幸なことでありますね。ですから学校というのは一つの大きな組織ではありますけども、そこに子ども達は育っていく人間ですから、これを枠の中に入れるといふのを止めるためにはどうしたらいいか。これは大変難しい問題だと思いつつもどうしたらいいか。加賀市が今お考えである地域から人材が流出していくといふことは、原因は何だろうかといふことをよくよく考えたら、より強固な知的な枠の中に入ろうとする意欲・意識がどこかにあるのではないかといふふうに思いますね。そうじゃない学校をどう作るかといふのはこれからの問題だと思いつつも、問題だと思いつつも、この会が何を目標にしているかといふことから始めなければいけない。そうすると多くのこういう考え方、未来を目的にするんですね。こうありたいといふ未来を目的にする。そうじゃなくて、そういかなかった原因の過去のところも問題にすべきであるといふように思います。そこに何か引っかかっているから、それは謙虚に反省をし、謙虚に訂正をしていかないといけないといふことが必要だと思いつつも。もう一つ、先ほど紹介いただかなかったんですけども、私は金沢ふるさと偉人館の館長も務めておりました。ここは明治の加賀藩の学術的な人材、世界的な、国家的な人達を偉人と言ったんですけ

ども、その中を見ていると大聖寺藩なんかは素晴らしいですよ。金沢に匹敵する。さすがに大聖寺十萬石の藩でありまして、素晴らしい人材がいらっしやる。そういう方を見ているとですね、これは一番重要なことは教師ですね。教師に恵まれなかったら人材が育たない。2番目には友人がよくなかったら駄目、3番目には両親の問題、4番目に地域社会あるいは歴史がある。学校経営は何としても教師に尽きる、こういうふうには思っております。しかし、例えば高等学校あるいは小中学校もそうですけど、人事は全て県人事でありますから、これは地域人事にならない。そうするといくらがんばってもですね、そこがまた一つの軋轢になる。これは実は何も加賀市だけではなくて全国がこの問題を抱えているんですね。これをもっと早く取り上げて人事権の問題はもっと別の角度で考えないといけない、こういうふうに思ったりもします。以上で終わりますけども、こういうわけで私はこの会の顧問としては的確ではないのではないかと喋りながらまた思っているわけです。以上でございます。

旭教育長 どうもありがとうございました。そんなことはございませんので、どうぞよろしく願いいたします。それでは最後になりますが、地元加賀市山代温泉のご出身で現在北陸放送社長であります笹原忠義様、よろしく願いいたします。

笹原顧問 北陸放送の笹原でございます。座ってお話させていただきます。教育関係者以外で私一人ということちょっと心細い思いをしているわけですが、地元ということでここに出てこいということになったんだろうと思います。教育とは無関係なところで育ちましたので、的外れなこれからの意見とかですね、あるいは教育関係者の皆様に失礼な意見を申し上げるかもしれませんがそこはお許しいただきたいと思っております。先ほどですね、小学校の成り立ちとか明治の大合併、それから昭和の大合併から平成の大合併ということで、加賀市はですね、一番言われるのは昭和の大合併で地域性がそのまま残っているわけですが、明治の大合併のまま小中学校が残っているわけですが、高校の方は、今、加賀インターの方からやって来たわけですが、最初に現れる高校が大聖寺実業高校でございます。この大聖寺実業高校は昭和40年代の初頭にできたと思うんですけども、石川県で初めて自動車科ができた学校だと思います。そのときはそのときですごい森の中であって教育環境がいいなと皆言っていたんですけども、しかし今来てみるとですね、子ども達のニーズがもう場所的には違っているのではないかと、あの当時はあの当時でよかったんですけども、今の子ども達はですね、テレビとかインターネットを通じて世界で繋がっている中でニーズマッチが上手くいっていないのではないかなという感じがあります。今日初めて見た高校がそれだったからですね、ですから他の高校もあるいはそうい

う面があるのかなという感じがいたします。それとともにですね、前もってこの資料をいくつか届けていただいて読ませていただいたんですけども、やっぱり一番びっくりしたのはですね、先ほど寺前市長がおっしゃってましたけれども加賀市から小松、それから能美、それから金沢、金沢はごく一部なんですけども通っている生徒が随分増えているなというか、多いんだなという感じがいたしました。私は山代小学校から中学校を出まして、昭和45年に高校に入るわけですけども、そのときに同級生の内多分4人だったと思いますね、小松高校へ行ったのは。だから加賀市の高校にいなかったのが寺前市長の前で大きい声であんまり言えるわけではないんですけども、それが今はもう小松高校へ行く人間が10何人、多いときは確か僕らの10年位後で20何人、30人は山代中学校で超えた時期があったと思いますけども、でも僕らの頃はですね、若者の中で中学校を卒業して2通りの考えがあって、今もそうであると思いますけども、地元をいたい子とどうしても出たいという子がいるんですね。選択の中でここから少々遠いけれども遠くまで行きたいという人間が何人かいて、後は学校の問題ではなくてやっぱり地元がいいやという人間が何人かいた。地元がいいやっていうのが減ってきたというのはですね、地元に対する高校の意識が随分変わってきたのかなという感じがいたします。僕らの頃は、と言ったら失礼なんですけど、7時50分にバスに乗れば大聖寺高校に行ける。小松高校に行くときは6時20分のバスに乗って加賀温泉で乗り換えて学校に着くのは8時20分。さあどっちを選びますかと言われたときに、ちょっと億劫だなと思いましたし、結構遅刻しましたけれども遠い方を選びました。でもやっぱり後から考えると7時50分の方が楽だったということで、後はもう大聖寺高校を選ぶか、あるいは小松高校を選ぶか、あるいは金沢の学校を選ぶかというのはですね、それぞれが個人の趣味の問題というか、それでも随分と99%以上が地元に残ったものでございます。あともう一つ余談になりますけども、顧問にどうですかと言われたときに色々金沢市内のことも考えてみました。前の県の教育長もいらっしゃる中おこがましい話なんですけれども、やっぱりまず高校は競争原理が働かないとおかしいのかなと、教育はあまり競争を持ち込むのではないと言われていた感じがいたします。金沢の場合はですね、スーパーハイスクールを中心にありまして、特色がなくなってきたなと思ったら、公開の場ですから実名を挙げて言っているのかどうか分かりませんが、中高一貫の高校を作りまして再び名を挙げてきて、うちの近所の子どもとかですね、あるいは的確な子どもがいないんでうちにも孫がいるんですけども、近くに住んでいるんで、中学から受験させて入れてしまえばストレートでいって勉強もいっぱいさせてくれるんだってと、そういう話題ができる学校になったんですね。それまではどちらかというと、その系列は旧制女子高の流れを汲むとかいろんなことがあって中々話題に上らなかつたんですけども、そういう話題が出てきた。ということになってくるとですね、あるいはさつき松田さんがおっしゃ

いましてように教育する人材があるという壁とかですね、そういうのを打ち破るためにはやっぱり今のままではなかなか難しいので、そういうこともまた一つ見てみる必要があるのかなと、ここで出来るか出来ないかは別にしてですね、この地域で一つ作るということを考えてみる価値はあるのではないかなというふうに思っております。小学校はですね、先ほど言いましたように明治にできてそこでいっぱい卒業生がいて、爺ちゃん婆ちゃんはその卒業生ですし、私もその卒業生ですから、そこを廃校だと言われても能登のように自然的に人数が減っていけばもう止むを得ないということがあるんですけども、加賀の場合は人数が減っていく、あるいはこれから5年後にはもっともっと17%が減少しますよと言われても、でもまだ能登に比べればかなり多い人数ということで中々そこまでは話が進んでいかないと思いますが、ここはどこかで決断しないとですね、その昔と違って交通の便も良くなりましたし、いろんな形で学校も通い易くなりました。あるいは加賀市の大ききぐらいだったらですね、スクールバスがぐるぐるぐるぐる巡回してあげればですね、どこの学校も行けるのかなという感じがいたします。問題はその小学校が持っている、あるいは中学校が持っている歴史をどうするかということだろうと思います。多分これは金沢では、私も人から聞いている話なのでよくわかりませんが、私どもの会社の近くにある小学校がですね、非常に昔からの古い学校で有名人をたくさん輩出しております、今一クラスで10何人しかいないんですね。それが6学年までしかない。それでも小学校は合併、合併、合併とやっていますけども、その小学校だけは絶対に残っている。校庭を見たら小さいもんでかわいそうな気がするんですが、かつてここは誰々が出たから、誰々が出たからと、歴史があつて、かつ、町の中心部の有力者の方々が、あの辺りはかつての金沢の中心部ですから中々そういう声が上がってこない。それはそれで歴史上として残さなければならぬ、あるいは何かしら引き継いでいかなければならぬものがある、それをどうするかはまた別問題として考えていかなければならないと思います。そんな中で見ておりましたら、これは歴史上残っているんだろうとか、かつて明治時代はこっちとこっちに分かれていたんだろうとかですね、その部分を抜きにしてですね、この議論をやっていかないと中々新しい部分には向かっていかないのではないかと思えます。それから、またアトラダムに言って失礼します。高校の話に戻るんですけどもね、大聖寺高校のOBが私の周りに非常に多くて、帰ってくると9割方が大聖寺高校のOBなんですけども、うちの会社にもたくさん大聖寺高校のOBが入ってきています。その人たちの気質はやっぱりいいですね。競争意識がないというか何というか、ナンバー2でいいというか、知っている限りですから誤解しないでいただきたいと思いますが、今回もですね、うちの会社の人間3人に聞きました。僕が加賀市出身ということで顧問になれと言われたので、色々わからないんで大聖寺高校の気質というものは遠くから見ていて何となくとい

うのはわかるんですけども、居る者はどうかと聞いたところ、ある大聖寺高校 OB の当社の 30 代の女性がですね、「なーん社長、私らはいいいんです。スポーツもほどほど、勉強もほどほど、目立たず、でも歴史を担って私ら聖高！と、こういう感じでいければいいんです。」とまあそれを聞いて皆頷いているんです。しゃかりきになって上がっていこうとかですね、しゃかりきになって人を押しのけていこうという感じが本当に少ない学校だなというふうに思いました。あくまでも当社ですよ。当社じゃなくて私が高校時代から感じていました。ですからですね、かつて 3 年程前にですね、2 番じゃダメなんですかと言う人がいましたけども、本当に 2 番でいいんですという感じなんで、ここをですね、モチベーションを上げてやっぱり一番になりたいとかですね、やっぱり教育の知の方の底上げというかですね、下から上げてたって中々上がらないんで、上を引き上げて下を引っ張り上げてくれるのが僕は一番だというふうに思ってます。ですから、その辺のところも実際考えながら色々の外れな意見もあるかもしれませんが、私なりに今後発言していきたいと思しますのでよろしく申し上げます。以上です。

旭教育長

どうもありがとうございました。短い時間で本当に申し訳ございませんでした。顧問になっていただきました 4 名の先生方には、いわばサッカーで言うところのサポーターのようなものだと思っております。厳しく叱責していただく時、あるいはちょっと拍手をしていただく時、色々あるかと思いますが、加賀市の教育について忌憚のないこれからのご指導のほどお願いしたいと思っております。それでは我々 5 名の教育委員の方も第 1 回目ですので簡単に自己紹介を 1~2 分で、すいませんが、上田委員長さんの方からお願いいたします。

上田委員長

先ほどご挨拶をさせていただきました委員長の上田でございます。私は平成 19 年に高等学校の教員を定年退職いたしました。それまで 38 年間全て学校現場で勤めさせていただきましたものですから、これは大変ありがたいことだというふうに思っております。そのほとんどが 1 学年 7 クラス以上の規模の大きい学校でございまして、私は一昨年の 11 月に教育委員の拝命を受けたわけなんですけども、それ以降いろんな加賀市の小学校・中学校を訪問させていただいて授業を見たり、お話をお聞きしたりということを経験してまいりましたが、1 年目の私とりましては、実は今問題になっております加賀市の小学校の大部分が 1 学年に 1 クラス、あるいは複式という形の学校が他の市町村に比べて多いわけですね。一番気になりましたのは、やはり 1 年生から 6 年生までクラス替えもなし。そういう意味では切磋琢磨する機会に乏しい。それはこれからの子どもの将来、長い人生にとってきっと大きな影響を与えるのではないかということをお心配いたしました。いつの時代でもそうですけども、教育にいろんな大きな効果を挙げてくれるのは教師の力である

というふうに思っております。子ども達は小規模ながらも明るく楽しく、そして生き生きとして授業を受け、あるいは教育活動をやっているわけですが、小規模ゆえのそういう切磋琢磨する機会の少なさというのは本当にこれでいいのかなという気持ちを抱かざるを得ませんでした。それは言い換えますと教員にとってもそうなんです。小学校ですと、例えば校長先生がいて、教頭先生がいて、1学年1クラス6名の先生がいて、あと養護の先生がいらっしゃる。そういう中で自分達の力量を高めるためにももちろん努力をなさっていらっしゃるわけですが、それはやっぱり限界があるのではなかろうか、こんなふうにも思っているわけであります。その意味で私どもが解決していかなければならない課題がたくさんあるわけですが、まず小学校の規模がこれでいいかどうかということを慎重に考えながら、適正規模・適正配置というものを早急に解決していかなければならない問題だというふうに思っております。どうぞよろしく願いいたします。

旭教育長 それでは石橋職務代理をお願いいたします。

石橋委員 加賀市教育委員会教育委員長職務代理を務めさせていただいております石橋と申します。よろしく願いをいたします。私は、先ほど笹原顧問のお話にありました、そこそこでいい大聖寺高校卒業でありまして、考えてみれば確かに笹原さんのおっしゃったような学校だったなと改めて感じます。私自身の仕事は山中温泉の方で山中漆器の関係の仕事をしておりますけども、そういう意味では教育関係に関しては全くの素人でした。ただ、私も教育委員になりましてこれで5年経ちます。5年経つとさすがにいろいろなことが少しずつ見えてくるようになりました。初めて教育委員になって知った言葉がレイマンコントロールという、俗にいう教育の素人が教育委員会においてですね、あまり関係のないとか全然違った見方で物を見る。そして提言していくことが大事だということ、これを改めて感じさせられるような状況であるかなと思います。私が今加賀市の子ども達に求めることは、まずは基礎基本の学力を上げていくこと、そして将来大人になってきちんと生きていくための適応力であるとか、考える力、いたずらに答えを見つけるのではなくて問題を解決していこうとする力をぜひ育て上げたい、また育てほしいというふうに感じております。もう一つは、自分だけの物の見方ではなくていろいろな人の物の見方があるんだと、そういうことをぜひ子どもに理解をしてほしいなと思います。今回、このような検討会議を設けさせていただいたのも、ともすれば加賀市の中だけにいて自分達の身の回りしか見えない我々教育委員に対して4人の顧問の先生方のいろんなお話をお聞きしてですね、全然違う視点がまた開けるのではないかと。そういう考え方があるのかということに、ぜひ思い直していただければありがたいなと思っております。ぜひともいろんな形でお力をお貸しいただければと思っております。よ

ろしくお願いいたします。

旭教育長 はい、それでは酒谷委員お願いいたします。

酒谷委員 酒谷でございます。私も学校の先生ではありませんし、学校という現場は子どもが学校にいるときにはずっと行っていましたけれども、子育ても随分前に終わりました、教育委員になりました久しぶりの学校でした。昔の私たちの子育ての部分と本当に随分と変わっているなど感じるということがいっぱいありました。ただ、専門的じゃなくても本当に普通の母親の目線から見ることも必要ではないかと思っておりますが、私も実は笹原社長さんと同じ山代温泉に住んでおります。温泉地も随分と変わってまいりました。その特殊な環境の中での子ども達を見てみますと、やはり温泉地ならではの問題を抱えた子ども達がいっぱいいるのも事実でございます。今回、本当にこんな身近で素晴らしい先生方のご意見、そしてご指導をいただける機会をいただきましたことに本当に感謝申し上げます。どうぞよろしくお願いいたします。

旭教育長 ありがとうございます。それでは、畑中委員お願いいたします。

畑中委員 こんにちは。教育委員になって半年の畑中です。私は山中町の出身でして、何年か前に加賀市と合併した所ですが、その山中町民からも田舎者と言われるような山の奥の方の出身で、私の兄は分校での複式学級の経験者、私自身はスクールバスで峠を超えて山中小学校に通っていました。その経験から言いますと、子どもにとっては統廃合というのはどうってことない。大人の名士の方々のノスタルジーが問題なのかなと思いますけれども、当時私が学生の頃は、山中は教育にお金をかけるころだという話を耳にしまして、子どもですからそれが本当かどうか検証することはありませんでしたけれども、子ども心に感心したことを覚えております。加賀市の教育委員になっていろんな問題が先送りになっているという現状を見ますと、これから大変だろうなと思いますけれども、私の若干の経験からお話をさせていただければなと思いますし、今回私の恩師もいらっしゃいますが、深くて広いお話を先生方から伺えるのを楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

旭教育長 ありがとうございます。それでは、進行役を務めながら誠に申し訳ないですが、私、教育長になって今年で4年目になります。元々は上田委員長さんと同じ県立高校の畑でありまして、地元大聖寺高校で校長をしておりました。青天の霹靂のようにして小中学校を中心に見る立場になりましたが、その前は県庁の方で、寺西前教育長さんの下で生涯学習課で勤めておりました。県庁では生涯学習課長までいきました。そのときには、国の方で清水潔

先生が生涯学習政策局長であられたような気がいたします。いろんなご縁があって今日があるんだなと思っております。ただ、地元大聖寺高校で長い間教鞭をとっておりましたが、地元を離れて県庁や小松高校や、あるいは金沢西高や、そういうところで勤めて地元加賀市を見ておりました。久方ぶりに大聖寺高校に帰ってきて校長を務めたとき、学校が変わったんじゃないかとショックを受けました。13年間ぐらい離れていたんですが、その間にリーマンショックなどいろんな経済不況がずっと続いておりました。大きなダメージを受けたんだと思います。だから経済格差が教育格差になったのかなという感じで、大聖寺高校の校長のとき、思っておりました。色々と大聖寺高校の校長の立場から小中学校を見ていたら、これは根っこからしっかりしないといけないなと思いました。この教育長を拝命されたときに、よし、小中からしっかりと固めていかなければならんという思いで今年で4年目であります。ただ、色々と学校の現場から見ていますと、子どもが変わったのではなくて時代によって、大人が変わったんであります。子どもをいかに育てるかは今も昔も一緒でございます。大人の価値観、社会が変わって子どもの見方も変わっていくから子どもも変わっていくんであります。それを我々自身が意識して意図的に子どもを変えていかない限りは駄目だということに気付きました。この地元の子どもの様子を見ていますと、先ほど笹原顧問が言われた通りです。気は優しく非常にマジメでシャイであります。ただ、問題点は覇気がないんです。なにくそという魂が、この地域は温泉に恵まれ、食に恵まれいろんな面で自然豊かで経済的にも豊かだったんでしょ。その傾向がずっと続いてハングリー精神がちょっと足りないような気がしますし、久方ぶりに地元に戻ってきて思ったのは、その覇気ももっとなくなっていたというのが私の感覚です。その中で、何としても子ども達に自信と誇りを持たせたい。そして郷土を誇りに思うような人材を育成したいと、こう思っておりましたし、今も思っております。ただ、いろんな人事にも関わっておりますが、教員人事の方で人材が枯渇しています。医師不足であることは重々わかっておりますが、医師だけではございません。教師が不足しております。ほとんど他市町からいただかなければならない。これは県の教育委員会にもお願いしきっている。ここのところをやっぱり、先ほど松田先生がおっしゃられました加賀市は地域から人材が流出していく、ここが私が最も教育問題として喫緊の課題であると立場上思っております。「鮭は生まれた川には戻ってこない。生まれ育った川に帰ってくる。」鮭という魚は生まれた卵であった所には帰ってこない。やはり育てないといけない。全国、全世界どこへ行ってもいいんですけども、故郷加賀市を絶えず思ってくれるような人材育成、そして将来学び続けるような子ども達を作っていかなければならない。そのためにはやはり単なる教育的な情熱・熱意だけでなく、仕掛けもしていかなければならない。そういうときに市長さんに色々とアドバイスをさせていただいております。何としてでも合併後の加賀市を、まずは人材育

成という加賀市教育力向上のためにも4人の顧問の先生方には大所高所から厳しいご叱責、ご指摘をいただきご教授いただき、またこの5人で勉強会を重ねて市長さんに報告をしながら加賀市の教育力向上に努めていきたいと考えていますのでどうぞよろしく願いいたします。以下、事務局の者も来ているんですが、また次のときに事務局を紹介させていただきたいと思えます。それでは、今日は第1回目で加賀市の実情を知っていただきたいということが主な目的でございますので、事前に加賀市の学校教育の資料をわけさせていただきましたけども、それについて網谷教育委員会事務局次長兼学校指導課長より説明してもらいます。それではお願いします。

#### ■加賀市の学校教育の現状について

網谷次長 資料に基づき説明

旭教育長 ありがとうございます。時間があまりなくて申し訳ないですが、概略を説明させていただきました。多岐にわたったかと思いますが、何か追加してご質問、ご意見ございませんでしょうか。清水先生ありますか。

清水顧問 ちょっとわかっていればということで教えてもらえればと思うんですけども、厚手の資料で「学習状況・生活調査・習慣調査」16ページなんですけれども、特にこの一番上の資料で授業を理解しているかどうかということころで、全体としてこの数字の中で中学校3年生の国語の部分が特に低くて、県との比較においても10ポイントほど下がっているというのは何か理由がわかるものがあるのかどうかということと、もう一つ、次のページなんですけども17ページ、学習がどの程度将来役に立って意義があるのかということについて特に中学校3年生の理科、理科は大体低いんですけども、それにしても半分を割るといのは異様な数字のような気もするんですけど、何かこの辺りがわかるかというのが2点目です。もう一つ3点目として、いわゆる学力調査に関連してですけども、学力調査で規模の問題というふうに言われましたけども、実際、小学校段階でもそれぞれの学校でどんな手立てを講じているかということで、進んでいる子に対して、あるいは遅れている子、特に遅れている子に対して例えば習熟度別指導とか、確か小学校段階でやっている学校が全国平均で5割を超えていたかなと思えますが、本市の場合はどういう状況なのか。特に小規模校が多いということの関連でどうなんだろうということは気になりましたね。わかれば教えていただきたいと思えます。

旭教育長 では、学校指導課長の網谷次長お願いします。

網谷次長 はい。今ほどの3点のご質問に対して今手元にある資料でご説明したいと思えますが、中学校3年生の国語の点数、そして理科の点数が極端に低いとい

うことのご指摘についてですが、それについては本市が抱える大きな課題・問題として中学生の生活、そして学力状況に課題があると言ってもいいと思います。小学校についてはどんどん右肩上がりでも成績も伸びているんですが、今ほどありました暴力行為の問題とか、スクールソーシャルワーカーを置いたのも実はそういった問題があって配置しているわけですが、理科とか国語というご指摘があったんですけども、どの教科に関わらず落ち着いて学習に取り組めるというような環境が一部の学校で上手く機能していない。じっくり学べる環境が中々作りにくいといった現状があって、そのことで一部頑張っている児童生徒と、それから中々そこへ入っていかない、またはそういった授業に集中できなくて立ち歩きやら教室を出て行くというような問題のある学校もございまして、そういった学校、一部の生徒によるそういった行為がその意識調査の低い部分で現れてきているのかなと考えております。本市としても、まず学べる環境を作ることが第一ということで、特に酷い家庭の問題がある子に関してはスクールソーシャルワーカーに入っていただく。それから特別支援員を配置することで落ち着いた学習環境を作りたいという形での努力を現在しているところでございます。なお、3つ目の質問にありました習熟度別の学習状況の支援についてですが、これは県の方から少人数授業及び習熟度別授業に関わる加配という形で中規模校以上の学校で特に課題のある学校については加配をいただきまして、現在適正な人数の中で特に理解度の進んでいる子、支援の必要な子についてはそれぞれ学校で対応しているという状況であります。以上です。

旭教育長 何%くらいですか。7割か8割ですか。

網谷次長 すみませんが、その資料が今ございませんので、数字的なことは申し上げられません。

旭教育長 今のところはそういうことで詳しいことは後でお知らせさせていただきます。

清水顧問 最初にお尋ねした1点目・2点目についてはむしろ生徒の状況というよりも、いわゆる将来学習することの意味について意味付けを生徒に与えるか与えないかという考えですし、やはりそのところを理解しているかどうかについて理解していないことの意識、その受け止め方はむしろ教員の側から見たらどう受け止めるのかなと、またわかったらいいので教えて下さい。別に今の機会でなくても結構です。

旭教育長 司会者が喋るのはあれなんです、この資料は当然21小学校と6中学校ですが、校長会を通して共有しております。加賀市の課題は、清水先生が言わ

れたように国語力が小学校からしっかりと培って中学へいかに繋げていくか、これが一つ課題ですよと共通の認識で普段の授業から言葉のことや日常の言葉使いの大切さ、加賀市は昨年11月9日にいじめ訴訟問題を受けました。全国でも珍しい判決だったんですが、9人訴えられまして3名が有罪であと6名が無罪ということでした。その線引きは何かというと言葉の暴力がいじめの始まりだと、「うざい」とか「くさい」とか「きもい」という言葉使いを集中的に被害者に浴びせた場合、これはいじめであり犯罪である。ただ、「あっち行っというて」とか「こっち来んというて」とか、これはきつい言葉かもしれないけども言葉の暴力ではないと判決を受けたわけです。そのようなことを踏まえまして、各学校に対して意図的に意識的に日常の言葉使いの大切さ、先生方がまず一丸になって今の言葉はいけないね、ということを繰り返そうよと、そしてPTA・保護者の方々にもこれはお金のかかることではございませんから、我々が意識すれば直ることで。地域の方にも言葉使いからよくしていこう、こういう運動を始めた、これは庄小学校と言うんですけども、私が教育長になってから3年間粘り強く、どんどんと子どもの学力が上がりましたし、国語力もよくなってきました。いろんな角度からやはり子どもは教育だと思います。錦城小学校は、食育と体力と早寝早起き朝ごはんなんですけども、生活リズムの向上を学校を挙げて、保護者を挙げて、地域を挙げてやったら子どもは変容しました。やはり学校は集団教育の場であると改めて認識させられたわけなのでございます。そういう点で、今の加賀市の課題は国語力、中身を色々調べたら中学校は白紙が多いんですね。意欲の問題に繋がってきますので、理科についてもその学年の育て方によって大分違うという傾向がわかってきました。だから小学校6年と中学校3年に国の試験にかけられますけども、県はまず小学校4年で県の学力テストで低学年のときの状況をチェックし、そしてどのようにして6年ときのテストにもっていくか。ずっと連動しているものだというので捉えております。一応、意識して取り組んでいるということだけお伝えしておきます。申し訳ございません、時間が迫ってまいりました。他に何か教育委員の方で先生方に質問とかございませんか。

全委員

質問なし。

旭教育長

先生方からはどうでしょうか。追加でこの辺が疑問だということはございませんでしょうか。もう一つ、加賀市で大きなプランがございます。これは首長部局の市長さんを中心とする方ですが、地産地学の推進ということで、今回のテーマにしていきたいと思っております。今、笹原顧問の方から色々問題点を指摘していただいたんですが、次はそれへの具体的な問題に入っていこうと思います。加賀市全体といたしましても、「加賀市ひとまちプラン」というものを計画しております。これについては掛山局長、簡単に説明をお

願います。

掛山局長

事務局長の掛山といいます。よろしくお願いいたします。皆様のお手元の方に加賀市ひとまちプランというパンフレットが配布されているかと思えます。こちらに市長さんがおいでになるのに私が説明するのも何なのですけども、加賀市は平成17年の10月に旧山中町と合併いたしました。その後、平成19年から28年に向けての第一次加賀市総合計画というものを制定いたしました。今年度から平成28年度に向けまして後期実施計画というものを加賀市の方で策定しております。中を開いていただきますと、「住んでよし、訪れてよしの加賀市」というテーマで、これはまちづくりの主要課題、方針と定めましてここにいくつか書いてあります。もう一回開いていただきますと左側に「住んでよしのまちづくり」、右側に「訪れてよしのまちづくり」というものがございます。私ども教育委員会に関係する部分は1番です。「住んでよしのまちづくり」、「地域で育て、学ぶ」、「地産地学の推進」この中には「文教ゾーンの整備」、この会ですが「教育体制整備計画の策定」という部分がテーマになっております。それからこれは市長部局とも絡んでですけども、「子育て環境の充実」というテーマを後期の計画の中で定められておりました。教育委員会としてはこれに向かって教育委員の皆様にも色々ご審議をいただいているところでございます。この会議もその一環でございます。それで、その真ん中に加賀温泉駅周辺のイメージ図というものがございます。この中で将来青色ですね、③コンベンション文教防災ゾーンというのがございますけども、こういった中で私どもが教育体制を考えていく中で新しい地域づくり、まちづくりの一環の中で教育にも取り組んでいく部分があるのか、ないのかという部分を教育委員の皆さんにご審議いただくことになっております。次回は今も教育長がお話しましたが、テーマを絞り込んだ中で地産地学ということについて、このひとまちプランに定められている後期実施計画に定められているこの部分について少しお話、ご審議、ご意見を伺いたいというふうに考えております。

旭教育長

どうもありがとうございました。時間がまいりましたのですが、今日はお忙しい中、市長さんにもお出でいただいたのですが、この件について何か追加はありませんか。

寺前市長

ありません。

旭教育長

今、事務局長の方からもありましたように、次回は地産地学の推進というところを中心テーマにして加賀市の教育力向上をいかにしたらいいか、また、人材育成等についていかにしたらいいか、子どもの意欲を喚起するにはどうしたらいいかというようところで大所高所からご意見いただけたらなど

： 思います。次回は一応9月の予定をしております。また事務局の方から連絡  
： させていただきますのでよろしく願いいたします。約束された時間の3時  
： にもう早なってしまう。それでは最後に石橋職務代理より閉会の挨拶を  
： お願いいたします。

石橋委員

： 本日は顧問の先生方には大変お忙しい中、お集まりいただき本当にありが  
： とうございました。まだ本当にさわりということもございましてですね、まだ  
： まだ加賀市の色々な問題に関して我々ももちろんご相談申し上げなければ  
： なりませんし、先生方におかれましても様々な問題を提起していただければ  
： 大変ありがたいと存じます。お忙しい方ばかりでございますので、中々お集  
： まりいただくことは難しいかと思えます。その辺は事務局とあわせましてで  
： すね、連絡を密に取らせていただきながら今加賀市が抱えている問題の解決  
： に向けてですね、ぜひとも今後ともよろしくお力添えをいただきますようお  
： 願いを申し上げます。締め言葉とさせていただきます。本日はありがとう  
： ございました。

以上、会議の顛末を記載し、会議録を作成する。